異国の奴隷

あめふらし３号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異国の奴隷

【Ｎコード】
Ｎ８２６３Ｔ

【作者名】
あめふらし３号

【あらすじ】
結婚式の直前になって婚約者に逃げられ、しかし元々結婚をすること自体に乗り気ではなかった主人公は実家を出て、一人気ままな生活を送っていた。そんなある日、実家に戻った際に妹から「異国の奴隷」について話を聞くことに。――――「異国の奴隷」によって引き起こされる出来事。その事の顛末とは一体いかなるものなのか。

1

「いかがされましたか」

不意にかけられた言葉に、私ははっと我に返った。見れば目の前でクセバがじっと私の言葉を待っている。きっと彼は、私が何らかの言葉を発するまでこのままずっと、いつまででも待っていることだろう。

「……いや。何でもないよ」

昔からずっと変わることのない、私に対して彼が見せる忠誠心。そのことに違和感を覚える私は、あまりにも冷めた主人であるのだろうか。

＊＊＊

クセバと初めて出会ったのは、今から7年前。私が１８歳の時であった。当時、私には親同士の決めた婚約者がいたのだが、結婚式の直前になって当の相手が他の女と駆け落ちをした。花嫁衣装など何から何まで全てを既に用意していた私や両親に対して、彼の両親はすぐさま真っ青な顔をして頭を下げに来た。

私は特に彼を愛しているわけでも何でもなかったため、そのことに

ショックを受けるということはなかったが、もう少し早くに言ってくれなかったものだろうかという気持ちはあった。だが、確かに彼にとってそれはなかなか難しいことであっただろう。彼と私とでは、確実に私の方がその家柄が上であったのだから。

元々結婚をすること自体に気乗りしていなかった私は、両親が何も言わないのを良いことに、それ以降に来た縁談を全て蹴った。そうしているうちに妹が結婚することになり、その夫となる男が我が家の家督となるに相応しいかどうかを確認した後、私は一人家を出た。

実家のある都から少し離れた西のとある村にて、私は小さな一軒家を買い、そこで自由気ままな生活を送っていた。単身で乗り込んできた私に対して、最初は遠巻きに様子を窺っていた村の人たちであったが、何かの拍子に私が、婚約者に逃げられてしまった、というようなことをポロリと零して以来、一気にその距離を縮めてきた。裁縫の腕に少し覚えがあったことも幸いし、私は案外すんなりと村に溶け込むことが出来た。

ある日、実家にいる妹から手紙が来た。それは『たまにはこっちに帰って来て欲しい』といったような旨の手紙であった。私にはまだ実家を出てから数カ月しか経っていないのにと思われたが、手紙のことを話した村の人にはすぐに帰ってあげるようにと強く勧められ、私はそれに流されるようにして実家に帰ることとなった。

実家に帰ると、妹夫婦が揃って出迎えてくれた。両親はちょうど知人の家に出かけていたため留守であったが、夕方には帰ってくるとのことだった。久しぶりに会った妹は至って元気そうで、夫婦仲も悪くなさそうな様子を見て、私は安心した。妹の方も私の姿を見て安心したような表情を見せたが、やはり一人身の私を心配してか、とある話を持ち掛けた。

何でも最近、都では異国の奴隷を持つことが流行しているらしい。奴隷という言葉に私は思わず眉をひそめたが、話を聞くと昔とは違い、奴隷とは言っても普通の使用人と何ら変わりないということだった。

その異国の奴隷にはちょっとした魔術を使える者が多く、その上容貌も整った者が多いということで、最近、都ではその異国の奴隷を持つことが一種のステータスとなっているそうだ。やはり所詮は金持ちの道楽ではないか、と私が不機嫌も露わに呟くと、妹はそんな私を宥めながら「それも否定できませんけど、本当に使用人としては何をやらせても優秀なんですって」と言って、私にその異国の奴隷が取引されている場所について説明し始めた。

翌日の昼過ぎになって、私がすっかり帰り支度を整え終わっているのを見ると、妹は驚いた顔をしてもう帰るのかと酷く責めてきた。そうは言っても、長居をして新婚夫婦の邪魔をするわけにもいかない。昨夜に両親との挨拶も済ませたし、今回の目的は既に果たした。そう説明しても妹が尚も食いついてくるので私はつい、帰り際に異国の奴隷が取引されている市場とやらを覗いてこようと思う、などと口走ってしまった。

すぐさま前言撤回をしようとしたが、それよりも先に「本当ですか！　……それなら仕方ありませんわね」と言って、若干不満そうな表情を残しながらも妹が折れてしまった。私は今更蒸し返すような真似も出来ず、「奴隷をお買いになった際には必ず私にも紹介して下さいね」と何度も確認するかのように言う妹の言葉に頷かざるを得なかった。

2

異国の奴隷が取引される市場は、本当に運の悪いことに、私の帰り道の途中に位置する町にあった。都から程近く、また海に面しているため、船に乗って各地から実に様々なものがこの町に入って来る。きっとその中に異国の奴隷も含まれているのだろう。

町に入ってみると、案外容易くその場所を見つけることが出来た。身をやつしてはいるものの、明らかに庶民ではない人々が向かう先にこっそりとついて行ってみたところ、その辿り着いた先がまさに例の市場であったのだ。

路地裏にある一見何の変哲もない、よくある古書屋。小難しそうな古書が、狭い店内いっぱいに並んだ本棚にも収まりきらずに、あちらこちらで積み上げられている。少々ぞんざいな扱いを受けていても、そのどれもが恐ろしい金額のついた代物である。確かに庶民であれば、こんな店に訪れる機会などまず一生ないだろう。

目の前に並ぶ膨大な古書をぼんやりと眺めていると、昨日、自分が口にした「金持ちの道楽」という言葉がふと頭をよぎった。やはり私にはどうしても、人の身を金で買うことへの抵抗感を拭いきれなかった。まだその市場を目にしていないが、実際にここまでは足を運んだのだ。妹には悪いが、この件に関してはこの辺で勘弁してもらおう。そう思ってそのまま私が店から出ようとした時、絶妙なタイミングで背後から声がかかった。

「おや、もうお帰りになられるのですか？　シューバック様」

何の疑いもなく発せられた家名に、私は自分が何者であるのか相手にすっかり知られてしまっていることを悟った。そうである以上、下手な態度を取るわけにもいかず、私はすぐさま表情を引き締めると相手に向き直った。

「えぇ。最近、こちらに都の方々がたくさん訪れていると人伝に聞きまして、こうして足を運んでみたのですが……情けないことに一目見ただけで気後れしてしまいまして。やはり私にはまだまだ早すぎるようです」

そう言って私はそれとなくこの古書屋の“裏の顔”を知っていることを匂わせつつ、そちらに関与する意思はないことを示した。そして更に「恥ずかしいので、このことはどうかご内密にお願い致します」と年相応の娘らしく頬を染めながら付け加えた。我ながら全く回りくどい言い方をするものだとは思うが、シューバックという家名を背負っている以上は仕方がない。本音を直接口に出さない、というのはいわば上流社会における暗黙のルールである。

先程私に声をかけたこの古書屋の店主は、私の言葉を聞いた後、その顔に浮かべた笑みをより一層深めた。その様子を見て私は、面倒な相手に引っ掛かってしまったかもしれない、と漠然と思った。

「……これはまたご謙遜を。シューバック様には是非ともご覧になって頂きたい代物がございます。どうか一目だけでもご覧になっていかれませんでしょうか？」

目の前で言葉を発する相手をよくよく観察してみると、一見無害な好好爺を装いながら、その目の奥は決して穏やかな色をしていない

ことが分かる。彼の言う、是非ともご覧になって頂きたい代物とは、まず古書のことではないだろう。正直なところ思い切り顔を顰めたい気持ちであったが、その衝動を必死に押さえ込んだ。やはりこんなところへ来るべきではなかった。この場で店主の誘いを断ることは容易いが、どうしてか私はその選択をする気にはなれなかった。

私は暫し思案するような表情をした後、口元にうっすらと笑みを浮かべると、了承の意を示すべく店主に向かってゆるりと頷いて見せた。

店主の後に続いて店の奥にある隠し扉の向こうに現れた階段を下ると、そこには薄暗い地下空間が広がっていた。そしてまっすぐな通路の両側に並ぶ、二つある扉のうちの一つを店主が開けた途端、大勢の人の話し声が耳に飛び込んできた。広い部屋の中、人々がいくつかの集団を作り、やや興奮したような様子でお互いに何かを話している。ほとんどの人は、私が今この部屋に入ってきたことにすら気づいていないようだ。

それにしても随分と立派な部屋である。床一面に深紅の絨毯が敷かれ、天井の中央にぶら下がる大きなシャンデリアと壁に取り付けられた幾つかの灯りによって室内は明るく照らし出され、そのあまりの明るさにここが地下であることをうっかり忘れてしまいそうになる。

そうしてさり気なく周囲の様子を観察しつつ、先程からこちらを一度も振り返ることなくひたすら歩き続ける店主の背を追っていると、私の存在に気付いた人々がちらちらとこちらに視線を向けながら何

やらひそひそと話す声が聞こえ始めた。暫く都を離れていたために忘れていたが、私に対する世間の関心は非常に残念なことにまだまだ薄れてはいないようだ。昨夜も両親から新たな縁談を持ちかけられ、一蹴してきたばかりである。

3

シューバック家とは、昔からそれなりに名の知れた家柄であったようだが、その名を広く世間に知らしめることになったのは、私の曾祖父の代からである。私の曾祖父の名はレブザ・シューバックといい、初代ハディナーン、バロイルの片腕と呼ばれた。

元々遊牧民であった者たちが、ある時から他の民族に溶け込むようにして定住するようになり、やがて自分たちだけの国の成立を目指すようになった。しかしながら幾度も失敗を繰り返し、時には自民族の絶滅の危機にまで晒されることとなった。そこにバロイルという一人の男が現れ、彼の下で自民族の結束が固められ、幾つもの戦いを経て見事、自民族による国の成立という長年の悲願を達成した。

繰り返される戦争の中で悉く勝利を引き寄せるバロイルを、人々はいつしか彼らが昔から守護神として崇めるハダラの加護を受けし者、ハディナーンと呼ぶようになり、国の成立後、彼は初代国王として君臨した。

これがこの国の成立に至るまでの歴史の概要であり、私の曾祖父はそんな、今もなお当時から変わることなく国の英雄として崇められる男の片腕として、人々の間に名を残している。曰く、国の成立後はその聡明さと鋭い洞察力をもって国王たるバロイルを支えたとさ

れるが、私が幼い頃に祖父から聞いた話はそれと大分異なっている。

祖父によれば、実のところレブザ・シューバックは決して弱いというわけではないが、そこまで強い軍人ではなかったそうだ。つまり極々普通の、あるいは普通より少し強いといった程度の腕前の軍人であった、と。よくよく考えてみれば、それも納得のいく話だ。何せ彼は本来、軍人とは程遠い上流階級の家柄に生まれた、シューバック家の二男坊である。軍人になった理由も、両親を始めとして周囲からいつも出来の良い長男と比べられ、「お前はあまりに文学の才がない」と貶される声から逃れたいがためであった。

それでは何故、そんな極々普通の軍人であった彼がバロイルの片腕と呼ばれるまでに至ったのか。そもそも両者はどのようにして出会ったのか。幼い私の問いかけに、祖父は笑って言った。

「私も同じことを父に尋ねたのだが、こればっかりはどうしても教えてくれなくてな。そうしたら傍で話を聞いていた母が、『どうせ、この底なしのお人好しのことだから、また余計な世話でも焼いて目を付けられたんでしょうよ』と言って、それきり父は何も言わなくなってしまった」

きっと図星であったのだろうな、と当時のことを思い出したのか、祖父はそれから暫く笑い続けた。

それまでの話を聞く限りでは、仲睦まじい夫婦のように感じていた曾祖父と曾祖母の間にも、実際には夫婦になるまでに色々とあっ

たようで、そもそも曾祖母はバロイルによって攻め滅ぼされた、とある少数民族の唯一の生き残りであった。

仲間を喪った曾祖母はその悲しみと激しい憎悪から、やがて仲間を奪った者への復讐を決意するものの、身も心も疲れ果てた小娘一人にはただ生き伸びるだけでも精一杯であった。それでも最終的にはなんと、敵の大将たるバロイルのすぐ近くにまで迫ったというから、たかが小娘一人といえども侮れない。しかしながら、さすがの曾祖母もあのバロイルに対して殺すどころか傷の一つすらつけることができず、半狂乱でただひたすらにバロイルへの呪いの言葉を叫んでいた彼女を取り抑えたのが、何を隠そう曾祖父であった。

そこから一体どのようにして結婚するまでに至ったのか、その詳細は祖父にも分からないとのことだったが、曾祖母曰く「今時ガキにも見られないくらい、まっすぐな心で必死に迫って来るもんだから、何だか生まれたての赤ん坊を無下に扱っているような罪悪感に苛まれて、耐えきれなくなった」とのことだ。

そんな過去を持つ曾祖母であるが、彼女はある特殊な能力を一つ持っていた。それは真実を見抜く目である。具体的に相手の過去や未来が見えるわけではなく、ただ目の前にいる相手の真実を見抜くのだ。この能力は血縁を通じて祖父や父、そして私にまで受け継がれている。

父が言うには、私はとりわけ曾祖母の血を強く引いているそうで、そのせいで私は幼い頃から家督を継ぐべくして父に散々扱かれる羽目になった。今でこそ理解できるものの、幼い頃はそんな父の思惑を知るわけもなく、日頃から私にはひたすら厳しく接し、あれこれ

と習わせるのに対し、妹にはひたすら甘い顔ばかりする父を、よく恨めしく思ったものだった。

4

「こちらがシューバック様にお見せしたい代物でございます」

時折すれ違う見知った相手には、失礼にならぬ程度に軽く会釈をしつつ、漸く足を止めた店主の言葉に視線を彼の示す方に向けると、そこには一人の小さな少年がいた。この広い室内の片隅でぽつりと、周囲から取り残されたかのようにして立っている。

少年は薄汚れた麻の衣服を身に纏い、そこから伸びる褐色の手足は痩せ細っていた。人の手が全く加えられた気配のない黒色の髪は彼の顔立ちを覆い隠し、彼が今一体どのような表情をしているのか全く窺い知ることが出来ない。

そこに浮かんでいるのは悲しみか、それとも怒りか。

あるいは、もはや感情などといったものは何も感じていないのかもしれない。少年の細い首に付けられた、彼をその場に縛り付ける鎖の付いた鉄の首輪を見て、私はそんなことを考えながら人知れず顔を歪めた。

「まぁ！　もしやそちらにいらっしゃるのは、サミカ様じゃありませんこと？」

何も言わず、私の反応を窺うようにしてじっとこちらの様子を観察する店主に対し、さて一体どうしたものだろうかと考えていると、

突如として背後から声をかけられた。そのいかにもたった今、気がついたとばかりの声色に、私はやはり絡んできたか、と内心で溜息を吐きつつ、口元に笑みを浮かべて背後を振り返った。

「これはこれは、メニエ様ではありませんか。お久し振りでございます」

視線を向けた先にいたのは、やはり思った通りの人物であった。流行物に目が無い彼女が異国の奴隷に興味を持たないはずがない。既に買ってしまっている可能性もあるが、仮にそうであったとしてもこの場に彼女がいることは十分にあり得る。出来ることなら何とか彼女には会わずに済ませたいものだ、と思っていたが、残念ながらその願いは叶わなかったようだ。

シューバック家と同様に、昔から名の知れた家柄であるピクーシャ家の一人娘、メニエ・ピクーシャ。彼女は昔から何かと私に絡み、陰ではこれでもかと私の悪態を吐く。嫌いなら嫌いとそのような態度を取ってくれればいいものを、私の前ではまるで一番の友人とばかりにいかにも親しげに接してくる。

あれだけ所構わず悪態を吐いておきながら私には知られていないとでも思っているのか、それともやはり態とそのような行動を取っているのか。いずれにせよ、私にとってはただただ理解しがたく、面倒な相手である。

「随分と長い間お姿を見かけないものだから、一体どうなさったのかと心配していましたのよ？　聞けば、都を離れてお一人で暮らしているそうじゃありませんか。一体、突然どうしてそのようなこと

を？」

振り返った私に対し、彼女はそう言って徐にその口元を扇で覆った。相も変わらずその言葉はまるで友人を心配するかのように装いながら、その言葉を発する目は隙あらば打ち落とそうと狙う、獲物を前にした狩人と何ら変わりない。先日の私の婚約者との一件を当然知っているだろうに、突然どうして、などとは白々しいにも程がある。

「ご心配をおかけして申し訳ありません。……少し田舎の空気が懐かしくなりまして」

私がやや俯きがちにそう返すと、彼女は「まぁ……、そうだったのですか」と言い、同時に扇の向こうでその口元がつり上げられたような気配がした。

「それにしましても、この場でサミカ様とお会いすることになるとは思いも寄りませんでしたわ。……今宵はそちらの奴隷をお買いに？」

彼女は続けてそう言うと、ちらりとその視線を私の背後にいる少年に向けた。

「いえ。今日は元々、この場を一目見るためだけに参りましたので。今はちょうどご厚意により、こちらの店主の方に案内して頂いていたところだったのですよ。メニエ様は今宵、この場にお買いになりにいらっしゃったのですか？」

「えぇ。私も今し方、この奴隷を買ったばかりですの」

私の問いかけに彼女はそう答えると、背後に控えていた側仕えにそ

の奴隷を私の前に引き出させた。

その奴隷は茶色の髪に琥珀色の瞳をした、一見して見目の良い少年であった。だが私が気になったのは彼のその見目の良さではなく、むしろその小綺麗さの方であった。思えば先程、店主に引き連れられて歩いている最中に人々の輪の中にちらりと見えた奴隷たちは、いずれもある程度小綺麗な格好をしていた。

この場では、彼らはあくまで商品である。商品である以上、買い手がつかなければ意味がない。それなのに今、私の背後にいる少年はどうしてあのような姿をしているのだろうか。

私はそこで初めて、明確な違和感を覚えた。

5

「初めまして。私、サミカ・シューバックと申します」

徐にやや腰を屈め、目線を少年に合わせるようにしながら私がそう言うと、目の前の少年はその琥珀色の目を見開き、びくりと体を震わせた。

「驚かせてしまったみたいですね、すみません」

そんな少年の様子に私がそう言って立ち上がると、何故か周囲の人間もみな、少年と同じ様な表情をして私のことを見ているのが分かった。

「……どうされました？　もしや私、何か粗相でも……」

「いえ。何も問題はありませんよ。お気になさらずに」

困惑を滲ませた私の言葉にすぐさま反応を返したのは、これまで私と彼女が会話する様子を黙って見守っていた店主であった。相変わらずその人好きのする顔には笑みが浮かんでいたが、その目は彼の心情を雄弁に物語っていた。奴隷に対して膝を折り、その上自ら挨拶をしようなどとは何と物好きなことか、と。

上流階級の人間の中には、“平民は自分たちのために働いて当然

”といったような考えを持つ者もいるが、私に言わせればそれは全く以て勘違いも甚だしい。それを言うなら、上流階級の人間こそが平民のために働いているのだ。

上流階級の人間は、生まれながらにその身分を保障されると同時に、大きな責任を負うことになる。突然予期せぬ大事が起こったとして、仮にそれがいかなる危険を伴うものであったとしても、彼らはその責任の名の下に身を挺し、精一杯問題解決に向けて尽力しなければならない。

もしもその責任の重さに耐えきれぬと言うのであれば、即刻その身分を捨て、一人の平民として生きるべきだ、とは私が幼い頃に祖父から常々言い聞かせられたことだ。そんな祖父の後を継いだ父もまた同じような信念を持っており、それが当たり前だと思って育った私は、初めて公の場に出た際に周囲からその認識の違いを突き付けられ、大いに驚いたものだった。

身分はあくまでその果たすべき役目の違いを表すものに過ぎず、決して人間の優劣を決めるものではない。更に言えば今、目の前にいる少年は異国の人間である。

一体どういった理由で自らを売る奴隷となるに至ったのかは分からないが、その素性が明らかではない以上、単に奴隷というだけで軽んじるのは、非常に軽率かつ危険な行為であるように思う。

建国当初はほとんど存在しなかった移民も、現在ではかなり増加しつつある。それに加えて今、俄かに上流階級の人間の間で流行しているこの異国の奴隷によって、恐らくその数は更に急増すること

になるだろう。その事実に、私は密かに不安を抱いている。

近頃、移民の流入によって自民族独自の文化が歪められる、などといったことを主張する学者もいるようだが、私が言いたいのはそんなことではない。

周囲の大半の異民族にとって、私たちは憎き征服者たるバロイルと同族の人間だ。私たちにとってみれば、建国当初のことなど既に遠い過去の話に過ぎないが、征服された挙句、曾祖母のように自分以外の一族を滅ぼされた人間にとっては今もなお、少しも薄れることのない確固とした現実として存在し続けていることだろう。

私の取り越し苦労であればいい。そう思いながらこれまで過ごしてきたが、昨日初めて妹から異国の奴隷について話を聞いて以来、私の内なる不安は募るばかりである。

そもそも何故、奴隷などという存在がこの国に突如として現れるようなことになったのか。彼らはどういった事情から奴隷となったのか。この異国の奴隷の取引にかかわっているのは、一体どんな人物なのか。考え始めればきりがない。

「……私、そろそろ失礼させて頂きますわ。両親も、私の夫もこの奴隷が来るのを心待ちにしているでしょうし」

店主に続き彼女はそう言うと、口元を覆っていた扇を閉じ、私に向かってどこか意味ありげな笑みを浮かべて見せた。その笑みが意味するのは、婚約者に逃げられた私に対して自分は歴とした夫がいるという優越感、といったところだろうか。

一体何が彼女をそこまで私と張り合おうという気に駆り立てるのかは分からないが、私が「皆様にもよろしくお伝え下さいませ」と軽く別れの挨拶を口にすると、彼女はそのまま上機嫌でこの場を後にした。

そんな彼女の後姿を暫し眺めながら、私もこのままこの場を立ち去ってしまいたいと思ったが、そういうわけにもいかない。すぐ傍から注がれる店主の視線を感じつつ、私は再び背後にいる少年の方に向き直った。

6

「挨拶が遅れてしまい、申し訳ありません。既に先程お聞きになったかもしれませんが、私、サミカ・シューバックと申します」

別の奴隷にはしっかりと挨拶をしておきながら、彼に対しては挨拶をしないというわけにはいかず、そう言って私は先程と同様にやや腰を屈めて挨拶をした。対する目の前の少年は、私の挨拶にも相変わらず何の反応も示していないようだった。

そんな少年の様子を何となく感じ取りつつ、私は内心で一体どうやってこの場を切り抜けたら良いものかと考えを巡らしながら、徐に顔を上げた。そしてその瞬間目に入ったものに、思わず目を見開いた。

大勢の目がある公の場にいることを思い出し、すぐさまいつも通りの笑みを浮かべて平静を装って見せたものの、未だに動悸が治まらない。密かに息を整えつつ、今一度確認しようとする衝動を払いのけるようにして、私は店主に視線を向けた。

「申し訳ありませんが、私もそろそろお暇しなければなりません。ご期待に添えず心苦しいばかりですが……やはり私には些か早すぎるようです」

自然というには少々無理のある、相手に対して気が急いているような印象を与える別れの言葉となってしまったが、致し方ない。実際、私は一刻も早くこの場を離れたいのだ。元々、長居をする気は全くなかったが、先程とある事実を目にして以来、長居はしたくないなどと、そんな悠長なことを言ってもいられなくなった。

「……さようでございますか。しかし、これは少々困りましたな。……実を申しますと、この奴隷はもう随分と長い間、主人が見つからずにおりまして」

店主は困惑しきったような表情をしてそう言うと、まるで秘密を教えるかのように声を潜め、「このままでは、この奴隷を本国へ帰さなければなりません」と続けた。

全て店主による商業上の策の一つに過ぎないとは知りながら、それでもやはり微かに良心が痛む私は、周囲の人間が言うようにお人好し過ぎるのだろうか。「お前は本当に父によく似ている」と言う祖父の言葉を思い出しつつ、私はすぐさま口を開くと、先程と同様に「申し訳ありませんが」と言って、重ねて断りの言葉を口にした。

一貫して頑なに拒否する私に、店主もあまり執拗に勧めるわけにはいかず、「誠に残念な限りです」と悔しさを見せつつも、やっと折れたようであった。「馬車をご用意しておきました」と言って、私を地上へ案内すべく徐に歩き始めた店主に続いて私も歩き出そうとした時、ふと背後でチャラリと鎖が擦れるような音がした。

思わず背後を振り返ってみると、それまでただじっと立った状態のまま何の反応も示さなかった少年が、いつの間にか床に両手、両膝

をついており、そこから更に頭を垂れて、その額までも床に擦りつけようとしていた。

少年のその見慣れぬ行動に、しかしながら私は見覚えがあった。確か、どこかの国かそれとも民族かの中で“恭順”の意を相手に示す行動であったはずだ。そしてそれは同時に、非常に屈辱的な行動でもあり、一生に一度行うかもしれぬ行為であると、何かの書物で読んだ覚えがある。

「何をなさっているのですか！　早く顔をお上げ下さい！」

私は慌てて少年の下に駆け寄り、必死になってそう声を掛けるものの、彼は顔を上げるどころかそのままその額を床に擦りつけた。これもまさか店主の指示によるものなのかと、私が感情そのままに背後を振り返ると、そこには本気で困惑した様子の店主が立っていた。その様子から店主は目の前で起こっている事態が把握できていないことが窺え、彼のこの行動が店主の指示によるものではないことは明白であった。

一体何を考えているんだと、私もまたひどく困惑しながら、少年にその行為をやめさせるべくあれこれと言葉を変えて頼み込むものの、彼は一向にやめようとはしなかった。

「……私が、貴方を雇いますから。あまり多くはお出しできませんけど、きちんとそれなりの賃金と待遇をお約束します。だから、どうか顔を上げて下さい」

部屋の奥の方で何やら妙なことが起こっているらしいと気づいた人々が段々と増えていくにつれて大きくなっていくざわめきに、ついに耐えきれなくなった私がそう言うと、少年は漸くその顔を上げた。そして先程とは違い、今度は至近距離で、見間違えようもないそれが私の目に映った。

――――――紫紺の瞳。

それは最早、この世に存在するはずのないもの。

7

自宅に連れ帰ったはいいものの、始めのうち少年は何も語ろうとせず、呼称がないことに困った私は彼のことをクセバと呼ぶことにした。クセバというのはこの辺りの標高の高い山地にのみ生息する植物の名前で、彼のその瞳と同じ色の花を咲かせることからその名を取った。

そのように説明した時も彼は黙ったままであったが、その首を縦に振って微かに一度頷いたのを私は見逃さなかった。

＊＊＊

クセバはあらゆる物事をそつなくこなし、本当に妹の言っていた通り、使用人としては優秀としか言いようがなかった。クセバはちょっとした魔術を使うこともでき、そして何と言っても周囲の関心を引いたのは、彼のその容姿であった。

出会った時は随分と衰弱した状態で、貧困に喘ぐ浮浪児にしか見えなかったその容姿は、成長するとともに上流階級の人間と見間違うほどの気品に満ち溢れた、目を奪われずにはいられぬほど麗しいものへと変わっていった。少なくとも、周囲の人間はそのように思っているだろう。

だが、私に言わせれば彼は元々、麗しい容姿をしていた。しかしながら、出会った頃は衣食住が十分に整った生活環境が与えられていなかったがために、それが損なわれてしまっていた。故に私との暮らしを通して変わったのではなく、本来あるべき姿に戻ったのだと、私はそのように感じているのだが、周囲の人間はそんなことは全く考えていないようであった。

“美しい奴隷をお持ちで羨ましい”、などと言われる程度で済むのなら、私も一向に構わないのだが、“婚約者に捨てられ、今度は年下の少年奴隷に入れ込んでいる”という、下らないとしか言いようがない噂が特に都の方でまことしやかに囁かれるようになり、不愉快極まりなかった。

しかしながら、私にとってはなかなか都合のよい噂なのかもしれない。私はこの先もよっぽどのことでも起こらない限り、結婚するつもりは全くない。時折ではあるものの、未だに性懲りもなく舞い込んでくる縁談話を一掃する手助けをしてくれるというのであれば、大いに結構である。

それに理由は違えども、クセバをあまり人目に晒したくはないという意味では、噂は正しい。挨拶をするために初めて実家に連れて行った際、家族たちの反応から、恐らく魔術によって彼の瞳の色が黒色に変えられているという事実が判明している。彼の瞳の色が紫紺であると他者に分からない以上、そこまで神経質になる必要はない。

けれども、基本的には常に魔術が掛けられている状態であるだろうに、私には彼の瞳の色が紫紺にしか見えないのだ。これまでに合わ

せて数回程、実家に彼を連れて行っているが、相変わらず家族にはしっかりと黒色に見えているのに対して、私にはやはり紫紺色にしか見えなかった。

これが曾祖母の能力によるものであれば、父も私と同じものが見えているはずであるが、これまでの様子から察するに他の家族同様、どうやら父にもクセバの本当の瞳の色が見えていないようであった。

これが父の言っていた、私が曾祖母の血を強く引いているという所以なのか。

私に見えて、父には見えないというものがこれまでなかったために、私は初めて己の目が映し出すものに対して一抹の不安を覚えた。

＊＊＊

「紅茶をお持ちしました」

クセバと共に暮らし始めてから、7年もの月日が流れた。出会った頃はあんなに小さくひ弱そうな体をしていた彼も、今や周囲からやや高めだと言われる私の身長をも追い越し、その丈夫で均整のとれた体を持つ彼の顔を見上げなければならない程になっていた。

自分では手を動かしつつ、ぼんやりと頭の中だけで考え事をしていたつもりであったが、実際にはすっかり手が止まってしまっていたらしい。クセバは、何でもないと答えた私にそれ以上問うようなこ

とはせず、手に持っていた紅茶と茶菓子を邪魔にならぬように作業台の隅にそっと置いた。

「ありがとう。……そうだな、そろそろ休息を取らなければな」

ふと近くの窓を見れば、美しい夕色の空が広がっていた。昼間に作業を開始してからあまり時間が経っていないように感じていたが、もうすっかり夕方になってしまったようだ。私は一度作業に取り掛かってしまうと、なかなか途中で手を止めることが出来ない。そのためいつも、こうしてクセバに声を掛けてもらうことで休息を取ったり、あるいはその日の作業を終わりにしたりしている。

思えば彼と暮らす前はひどいもので、一つの作品を仕上げるまでの間、ほとんど飲まず食わず寝ずの状態であった。さすがに、作品を仕上げた後の数日はほとんど寝たきりの状態であったが、それでもそんなことを繰り返していられたのはやはり多少若かったせいもあるのだろう。今、そんな真似をしたならば、きっと体をこわすに違いない。

8

じんわりと体全体に広がっていく紅茶のまろやかな甘みに、自然と肩の力が抜けていくのが分かった。クセバが入れる紅茶の味は、また格別であった。

一昨日から始めた作業であるが、あともう少しで完成させることが出来そうである。今まで一心に作業を進めてきた手元のそれに目をやりながら、完成品を渡した時に相手が返すであろう反応が脳裏に浮かび、思わず笑みが零れた。

7年前と比べると現在は、私の予想通り異国の奴隷の数は急増し、今や上流階級にとどまらず中流階級のなかにも異国の奴隷を持つ者がいるほどになった。彼らの存在により、この国は特に商業や農業といった方面で大きな発展を遂げ、国全体が活気に満ち溢れている。

異国の奴隷に関して、今のところ特に大きな問題が起こったという話もなく、私が恐れていたような事態が起こる予兆も見られないが、この先どうなるかは分からない。１０年後、２０年後という長い目で見れば、もしかすると大分安定してきた今こそ、実は一番気をつけばければならない時期であるのかもしれない。

妹夫婦は男女二人の子宝に恵まれ、下の子は昨年生まれたばかりで、現在は一人歩きをするようになり一時も目が離せないのだと、先日実家に帰った際に妹が言っていた。上の子はそんな風に母親が弟に付きっきりであることにやはり寂しさを感じているようで、近頃私が比較的頻繁に実家に顔を出すことに対して、大変嬉しそうにしていた。

そんな姪の誕生日が一週間後に控えており、もうすぐ6歳になる彼女のために、私はワンピースを作っていた。可愛らしい花柄の茶色の生地を、裾の部分が広がるようにゆったりとした形のワンピースに仕立て終え、あとは少し開いた首周りと裾にレースを付け加えれば完成となる。

私も幼い頃は、格式ばった夜会に着ていくようなドレスの類ではなく、こういった町に住む平民の娘たちが母親に作ってもらうような服に憧れたものであった。裁縫の腕を磨き、自分自身で服を作るまでになったのは、きっとそういった憧れを抱きつつも、結局そのような服を着る機会が得られなかったせいもあるのだろう。

夕食を終え、また作業室に籠って作業に取り組んでいると、トントンと微かに誰かが戸を叩く音が聞こえたような気がした。こんな夜に一体誰が来たのであろうか、と疑問に思いつつも、何かあればクセバが呼びに来るであろうと、私はその場を動かなかった。

ところが暫く経ってもクセバがこの場に姿を現さないので、きっと先程の音は私の聞き間違いか何かであったのだろうと思っていたと

ころ、再びトントンという音が聞こえた。先程よりも少し大きなその音が気になり、私は作業を止めて部屋を出た。

「どうかなさいましたか」

玄関の戸を開いてすぐの場所にある居間に行くと、夕食の片づけの途中であったのか、クセバはテーブルの上を布で拭いていた。

「さっき、誰かが戸を叩くような音が聞こえた気がしたんだが、何か聞こえなかったか？」

私に気づき、すぐにその手を止めて姿勢を正したクセバは、私の問いに「いいえ。何も聞こえませんでした」と答えた。その口調も表情も至って普段通りであり、何一つおかしな点はない。しかしながら、私はすぐにそれが嘘であると分かってしまった。

「そうか。だが念のため、戸を開けて外に誰もいないか確認してくれないか？　聞き間違いだろうが、二度も物音が聞こえたものだから、どうにも気になるんだ」

「分かりました。すぐに確認して参ります」

私の言葉に対して不思議な顔をすることもなく、クセバはそう答えるとすぐさま玄関の戸の前に行き、いつものようにゆっくりとその戸を開けた。

「……クセバ？　どうした。外に何かあったのか？」

戸を僅かに開けたまま動かなくなってしまったクセバの様子を不審に思い、徐に彼の方へと近づいて行くと、不意に目の前にいたクセバの姿が一瞬にして消えた。そしてその直後、背後から素早くぴたりと自分の首筋に何かが当てられたのが分かった。

そのあまりに突然の出来事に、言葉を発せられずにいると、僅かに開いた戸の外からくつくつと抑えきれぬかのようにして笑う声が聞こえた。じっと見つめていると、やがて戸に浅黒い肌をした手が掛けられ、そのまま戸が更に開けられたかと思うと、続いて一人の男がその手を戸に掛けたまま、家の中へと足を踏み入れてきた。

「さすがのアンタも驚いたってか。そうだよなぁ、まさか自分に従順な奴隷に刃を向けられるとは思わないよなぁ？」

男は未だに笑いが治まらないのか、額のあたりに手を当て俯きがちのままそう言った後、徐にその顔を上げ、うっすらとした笑みを浮かべた。

「……やっと会えたな。サミカ・シューバック」

私を射抜かんばかりに、まっすぐに向けてくるその鋭利な瞳は、淡い紫色であった。

9

その瞳の色を見た瞬間、私の頭の中で閃くものがあった。それと同時に、それまでばらばらであった破片が作り上げた恐ろしい仮説に身の毛がよだつ思いがした。ひょっとして、私はとんでもない過ちを犯してしまったのかもしれない、と。

だが、まだそうであると決まったわけではない。相変わらず鋭い視線を向けてくる男は、無言を貫く私に対して何か行動を起こそうという気配は感じられず、ただ私の言葉を待っているだけのように見える。動揺する心を叱咤し、私はその視線を受け止めながら、ゆっくりと口を開いた。

「貴方は誰ですか」

男は私の言葉に一度その鋭い視線を和らげたかと思うと、今度はにたりとその口元をつり上げて見せた。

「いいぜ、その目。それでこそ“最後の継承者”に相応しい」

「……それはどういう意味ですか」

男の言った“最後の継承者”という嫌な響きに、知らず握りしめた手がしっとりと汗ばんでくる。けれどもそんな体の反応とは裏腹に、至極冷静な頭がその言葉の意味を推測し、導かれた答えを弾き出した。一方で私の表情から私が何かを悟ったことに気付いたのか、男はその目を細めると、事も無げに無慈悲な言葉を口にした。

「そりゃあ、アンタがシューバック家最後の人間って意味さ。他の

奴らはとっくに殺しちまったからな」

自分の首筋に当てられた刃を気にすることなく、拘束から逃れようと身を捩るとすぐさま肌に刃が食い込み、そこからじんわりと血が溢れてくるのが分かった。いっそのこと、このまま死んでしまおうかとも思った。先程の男の言葉は嘘ではなかった。恐らく、もうこの世に私の家族は誰一人として存在しないのだろう。

ところが私が更に身動ぎしようとした時、それを止めるかのようにして私の両手が素早く後ろ手に拘束され、それと同時に何か見えない力によって全身をも拘束されるのが分かった。きっとまた目の前の男が何かしたに違いないと思い、すぐさま男に視線を向けたものの、ところが男はまるで予期せぬ事態を面白がるような表情をしていた。これが目の前の男によるものではないとすれば、残るはただ一人しかいない。

「……放せ」

苛立ちそのままに低い声で鋭くそう言い放つものの、私の身を拘束する力は全く弱まる気配がない。止めどなく込み上げてくる悔しさのあまりに唇を噛みしめると、くつくつと再び目の前の男が心底おかしそうに身を震わせながら笑う声が聞こえてきた。

「最高だな。アンタのそういう顔を見るために、本来は一番に殺しておきたいアンタをわざわざ生かしておいたんだ」

そう言うと男は玄関の戸から手を離し、徐に私の方へと更に近づいてくると、目線を合わせるかのようにやや身を屈めて私の目を間近

から覗きこんだ。
「アンタにはちゃんと一通り説明してやる。聞かせる価値があるからな。……さて、何から聞きたい？」
まるで遠くから聞こえた、バタンという扉の閉まる音がどうしてかなかなか耳から離れなかった。

「この国の現状はどうなっているのですか」
「とりあえず国内の人間は一通り片づけた。一応言っておくが、俺らには殺すことに悦を感じるような趣味はないからな。恐らくほとんどの奴は、自分が死んだことにも気づいてないんじゃないか？」
「それは女子供も関係なく、ですか」
「あぁ。女子供も身分も関係なく、みなさん平等に一発で片づけさせてもらった。なかなか優しいだろ？」
「……遺体はどうしたのですか」
「その場で骨まで焼き尽くしちまったから、もう何も残ってないな」
矢継ぎ早にそこまで聞いたところで、私は口を噤んだ。聞けば聞くほどに、まるで自分が底のない暗闇に呑み込まれていくような思いがした。男の言葉にはやはり、どれ一つとして嘘はなかった。
「……何だ、もう質問はおしまいか？　まだ聞きたいことがあるんじゃないのか？」
男は暫くの間、何も言わなくなった私の様子を目の前で腕を組んで

眺めていたが、やがてそう言って意味ありげな笑みを浮かべて見せた。そしてその目は私に対してはっきりと、まだ聞くべきことが残っているじゃないかと催促していた。

「……実際に侵略を開始したのは、一昨日の晩ですか」

そう言った自分の声は、震えてはいないものの自分でも驚くほど頼りなく響いた。

「あぁ、その通りだ。何だ、やっぱりちゃんと分かってるじゃないか」

私の言葉を聞いた男は、そう言ってより一層その笑みを深めながら続けた。

「そうさ。この国を破滅に導いたのは他でもない、アンタなんだよ」

10

その民族は、昔から多くの者が魔術を操ることで有名だった。なかでも桁違いの魔術を操ることの出来る一族が存在し、彼らはこの世で唯一の紫紺の瞳を持っていた。代々その一族の人間を長とし、圧倒的な力を以て周囲に恐れを抱かれていた民族であったが、実際はとても温和な性格をしており、進んで周囲と争うなどということはなかった。

そんな彼らに対して戦争を仕掛けたのが、バロイルであった。その時既に彼らの居住地のすぐ近くの土地を獲得していたバロイルは、更にその領土を拡大しようと彼らの持つ肥沃な土地に目を付けた。だがさすがのバロイルも彼らに対しては苦戦を強いられ、戦争は長期化の様相を呈していた。そこでバロイルは彼らに対して和睦を申し入れ、彼らもまたそれを受け入れた。

ところが、和睦を結ぶために彼らの長がバロイルの陣営まで出向いた際、その和睦の酒宴にてバロイルは彼を謀殺した。そしてその後バロイルは容赦なく戦争を再開し、主たる指導者であった長を失い動揺していた彼らに対して瞬く間に完全勝利を収めた。

現在と同様に当時もこの事実は極一部の人間にしか知られておらず、圧倒的な力を持っていた彼らにさえも勝利したとして、それ故にバロイルはハディナーンとまで呼ばれるに至った。そう話す祖父の顔は、それまで見たことがないほど苦々しげに顔を歪めていた。

「“一人殺せば殺人者、大量に殺せば英雄”とはよく言ったものだ。戦争において人道がどうなどと説くほど愚かではないが、策略を巡らすにしてもこういった類はやはり後味が悪い」

無知というのもまたなかなか罪深いことだ、と呟くと祖父はまた話を続けた。

＊＊＊

奪われた土地を奪還すべくこの国を侵略しようという目論み自体は数十年前からあったものの、非常に優れた先見の明を持っていた祖父の存在によってなかなか実行に移すことが出来なかったこと。そんな祖父の亡き後、彼らにとっての唯一の懸念要素は、祖父以上に物事を見抜く能力を持つという私であったこと。だが次第に私が祖父とは違い、随分とお人好しな性格をしていることが判明したため、慎重にゆっくりと時間を掛けて計画を進めていった結果、面白いほど思惑通りに事が運んだこと。

男が得意げな顔をしてここに至るまでの経緯を事細かに語っていたが、守るべきものを全て失ってしまった私が今更それを聞いたところで何の意味も為さず、私は断罪を前に己の罪状を読み上げられる罪人の如く力無く俯いていた。

私がその浅慮さ故に犯した過ちはいくつもあったが、やはり何と

言っても最大の過ちは、彼らにとって恐らく最重要人物であろうクセバを国に突き出すどころか自らの手で匿うような真似をしてしまったことだろう。

クセバと初めて出会い、そして彼がバロイルによって滅ぼされたかの一族の血を引く人間であると分かった瞬間、私の脳裏に浮かんだのは曾祖母の姿であった。煌びやかな世界の中、ただ一人だけみすぼらしい恰好をして鉄の首輪に繋がれた姿を見て思わず心を揺さぶられ、それこそが店主の思惑ではないかと気づきながらもやはり彼をそのまま捨て置くことが出来なかった。

そうして国に突き出さずとも自分の監視下に置いておけば良いのではないだろうかと彼を引き取り、共に生活をしていく中で極稀にではあるが感情というものを表に出すようになった彼を見て、これで良かったのではないかと思っていた。けれども今にして思えば、それは全く以て身勝手で愚かな考えでしかなかった。

「それにしても、まさかアンタが自分から都を離れてくれるとは思わなかった」

胸の内でひたすらに湧き上がり続ける後悔と自責の念に苛まれ、それまでずっと男の言葉を聞き流していたが、ふとした瞬間にそんな言葉が耳に入ってきた。

「しかもそのきっかけとなった妹の縁談はアンタが率先して進めたって話じゃないか。確かにアンタは元々結婚することにあまり積極

的じゃなかったが、それでも家のためには仕方がないと思ってたんじゃなかったのか？　婚約解消後にアンタのところにやってきた縁談もなかなか悪くないものばかりだっただろ？」

徐に顔を上げてみると、男は腕を組んだ状態で近くの壁に背を預けるようにして立っており、どこか意味ありげな笑みを浮かべながらまるで同意を求めるかのような視線を私に向けていた。

確かに男の言うとおり、あの時やってきた縁談はこちらにとってどれも悪いものではなく、自分でも随分と勝手なことをしているという自覚があった。けれども当時、調べを進めていくうちにどうやら本当に自分の婚約者であった男が他の女と駆け落ちをしたようだということが明らかになり、それと同時に結婚に対する嫌悪感が急激に増していった。そんな感情を持ちながら、それでも結婚しようという気になど私は到底なれなかった。

「……まぁでも、おかげであの男も無駄死にせずに済んだってわけだ」

本当に一体どうしてあんなにも激しい嫌悪感が芽生えたのだろうかと、虚ろな頭でぼんやりと考えていると、再び男のそんな言葉が耳に飛び込んできた。

11

……あの男も無駄死にせずに済んだ？

一体誰のことを言っているのだろうかと考えていると、男はそんな私を馬鹿にするかのような笑みを浮かべて言った。

「もっとも、勝手に駆け落ちして消えた元婚約者のことなんてさっぱり忘れちまったか？」

その男の言葉を耳にした途端、私の頭の中にいきなり張り手を食らわされたような、全く予想だにせぬ衝撃が走った。

……嘘だ。そんなはずはない。

嘘だ。嘘だ。嘘だ！

衝撃による興奮覚めやらぬままの状態でまず最初に湧き上がってきたのは、既に積み上げられた仮説に突如として新たに加えられた一つの破片を砕かんとする強い拒絶の感情であった。

けれども私の頭は一方でそんな悲痛な叫び声を上げながら、もう一方ではひどく冷静にその叫び声を抑えつけていた。今だけはこの身が魔術によって拘束されていて良かったと思う。そうでなければ既に情けなくもこの場にへたり込んでしまっていたに違いない。それでもきっと、この動揺する心はもうほとんど隠し切れていないのだろう。顔の強張りがいつまでも消えない。

「アンタの元婚約者は本当は駆け落ちなんてしてない。アンタについての情報を餌にしておびき寄せ、頃合いを見計らって俺たちが殺したのさ」

嘘じゃないというのなら、目撃者たちによるあの数々の証言は何だったというのか。まるで人目を避けるかのようにして、彼は何度も見知らぬ女と逢瀬を重ねていたと。仲睦まじげに会話をし、彼らは度々口づけを交わしていたと。それとも彼は魔術にでも掛けられていたというのか。いや、そんなはずはない。逢瀬を重ねているその合間に私は彼に会っているが、そのようなおかしな点は全く感じられなかった。

「アンタならくどくど言わなくったって分かるだろう？　……今、俺が言ったことの中に嘘は一つもない。そうだろ？」

得意げに歪められたその口が憎くて仕方がない。けれども確かに男の言う通り、その言葉の中に嘘はない。

……嘘は、ない。

嘘ではない。ならばそれが真実かといえば、必ずしもそうとは限らない。真実とはなかなか厄介なものなのだ、といつか祖父が言っていた。一体真実の何が厄介なのかと私が聞くと、祖父はこう答えた。

「真実というのは一つであって一つではないんだ。実際は人間の数だけ存在するものなんだよ。喜怒哀楽といった感情一つで、たとえ

同じものを見ていたとしても人によってまるで全く違ったもののように見えてしまう。それが嫉妬や恨み辛みとかいう負の感情であるなら尚更のことだ」

それ故に真実が知りたいのならば多くの者と言葉を交わし、その心に触れてみなければならないと、そう言っていた。

真実は一つであって一つではない。それが私にはずっと理解できなかった。誰が何を考えていようとその目に映るものは変わらないだろうと、そう思っていた。けれども本当に、感情一つで同じものが全く違ったものに見えることがあるというのか。それならば彼の姿を目撃したと言う彼らが実際に目にした光景は、その実態とは本当は一体どのようなものであったのだろうか。

＊＊＊

彼とは縁談をきっかけに出会った。私が１５の歳を迎え、社交界へ出るようになってすぐに舞い込んできた複数の縁談。その中の一つが私より４つ年上である彼との縁談であった。結婚など全く気乗りせず面倒で仕方がなかったが、ほぼ全ての縁談の相手と機会を設けて直接話をした。表面は取り繕いつつも明らかにこちらの家柄に目を付け、私を使って何とか取り入ろうとする者が多いなか、会話を通じて彼に対して抱いた第一印象はとにかく普通ということであった。

その家柄は上流とも中流とも甲乙つけがたい微妙な位置にあるも

のの、現当主は出世欲を見せる素振りは全く感じられず、その二男である彼自身もまた優秀な文官であるとして宰相殿に重用されているという割に高官特有の歪みといったものが一切見受けられない、普通の感覚を持つ人物であるように感じられた。

しかしながら、ただ一つ気になったことは、この縁談についてどのように考えているのか、という私からのかなり穿った質問に対する彼の返答についてであった。

「それはもちろん、貴女と結婚したいと思っていますよ」

何の躊躇いもなくさらりと答えたその言葉には、打算などといったものがあるようにも思えず、だからと言ってその目は甘さを含んだものであるわけでもなく、あくまで飄々とした様子でこちらを見る彼が一体何を思っているのか私には全く分からなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8263t/

異国の奴隷

2011年11月28日06時23分発行